

等合成麻薬事犯で検挙した少年は31人で、前年に比べ32人(50.8%)減少した。少年の薬物事犯のうちでは、有機溶剤の乱用が依然として大半を占めているが、1990年代初めは2万人前後検挙され、その数は激減している。

このような警察検挙数の変化が、実際の非行臨床場面における薬物乱用を反映しているかどうかを把握することは非行臨床の実践にとっても重要である。

薬物乱用では実際に検挙されず暗数となっている乱用者が多いため、実際の薬物乱用数を推定するための疫学調査がどうしても必要である。

本調査では、2006年に引き続き児童自立支援施設入所非行児の薬物乱用実態を調査することにより薬物乱用のハイリスク群である非行児の薬物乱用の動態を把握する。おもな調査対象薬物は、われわれの従来調査の結果と比較できることおよび他の調査研究や司法統計資料と比較検討できることより有機溶剤、大麻、覚せい剤、ブタンとしたが、その他の薬物についても簡単に乱用経験および周囲の乱用状況を尋ねる質問項目を追加した。

## B 方法

### 1 対象

全国の57の児童自立支援施設入所児童、児童自立支援施設に調査用紙を配布した。回答が得られた施設は、48施設であった(施設回収率84.2%)。分析では性別の記載のなかった者を除いた。その結果最終的調査対象者数は1289人(男性869人、女性420人)となった。

### 2 調査用紙

調査用紙は資料に示した。調査が今後も同一施設に継続的に実施できるよう、なるべく被調査施設および被調査者の負担にならないように留意した。

調査項目は、薬物乱用関連項目、薬物以外の非行関連項目、性格検査項目、一般個人属性などである。薬物乱用に関する質問項目は前回までとほぼ同じである。

今回、薬物に対するイメージを検討するためにSD法により喫煙と有機溶剤乱用を比較することとした。このSD法検査は昨年度の児童自立支援施設面接調査で実施したものである<sup>7)</sup>。項目数は18項目

である。ただしこの薬物イメージは今回の分析には含まない。

### 3 調査手続き

調査用紙は各施設に郵送し、施設ごと集団で実施してもらった。終了後施設ごとに一括して返送してもらった。回答は無記名式で、もし回答したくない場合は回答しなくても良い旨を質問紙に書き添えた。

## C 結果

### 1 対象者の属性

対象者の、性・学年構成、性・年齢構成、施設入所期間、地域別人数、非行歴、初発非行年齢、家庭裁判所係属歴を表1から表7に示した。

性別にみると男性が869人で全体の67.4%を占めている。就学状況は、中学3年生が男性364人(41.9%)、女性が190人(45.2%)と最も多い。中学生が男性の80.5%、女性の78.5%で多いが、高校生および専門学校生が男性4.7%、女性5.7%であった。中学卒業後で無職である者も男性5.4%、女性8.1%を占めている。そのほか小学生が男女それぞれ6.6%、1.4%いた。就労者は男女それぞれ0.3%、1.7%であった(表1)。年齢で見ると中学2年および3年に相当する14歳および15歳が男性でそれぞれ35.0%、28.5%、女性で35.2%、33.3%と多くを占めていた。一方、18歳以上の者は男女それぞれ1.1%、2.1%であった(表2)。

施設入所期間は、入所初期の3ヶ月以下の者が男性164人(18.9%)、女性99人(23.6%)であった。一方、2年以上入所している者は男性104人(12.0%)、女性39人(9.3%)いた(表3)。

在住地は、施設の所在地により北海道・東北、関東、中部、関西、中国・四国、九州・沖縄に分けた。国立2施設については児童本人の居住地を確認していないため在住地不詳とした。最も人数が多かった地域は関東(男性216人、女性88人)であり、また調査対象数が最も少なかったのは中部(男性75人、女性32人)であった(表4)。

非行歴に関しては多いものから順に、男性では怠学604人(69.5%)、家出・外泊582人(67.0%)、窃盗550人(63.3%)、自転車盗 534人(61.4%)、女性では家出・外泊358人(85.2%)、怠学355人(84.5%)、窃盗284人(67.6%)、不良交友 283人(67.4%)、自転車盗281人(66.9%)などとなってい

る(表5)。

初発非行年齢は、男女とも小学校5年から中学校1年が10%台で多い。女性では全体に男性より初発非行がやや高い傾向にあり、女性の最も多い初発非行年齢は中学1年の91人(21.7%)であった(表6)。

家庭裁判所への係属歴は、性差はなく、男性181人(26.1%)、女性82人(28.0%)である(表7)。

## 2 薬物乱用の頻度

調査対象薬物は前回2006年調査と同じく有機溶剤、ブタン、大麻、覚せい剤、コカイン、睡眠薬、安定剤、咳止め液、MDMA、リタリンである。非行児の薬物乱用は、女性に多いため、男女別に検討した。また、薬物への意識は、薬物乱用者と非乱用者で異なると予想されるので両者を分けて分析した。

### 1) 周囲の薬物乱用頻度(表8)

少年達の交友関係など周囲に各種薬物乱用者がいるかどうか尋ねた。その結果、すべての薬物で女性は男性よりも周囲の薬物乱用頻度が高かった。

男性では、有機溶剤245人(28.2%)、ブタン199人(22.9%)、大麻129人(14.8%)、安定剤120人(13.8%)、覚せい剤96人(11.0%)、咳止め液85人(9.8%)、MDMA28人(3.2%)、コカイン23人(2.6%)、リタリン22人(2.5%)、睡眠薬14人(1.6%)の順であった。

女性では有機溶剤244人(58.1%)、ブタン165人(39.3%)、覚せい剤・安定剤154人(36.7%)、大麻153人(36.4%)、咳止め液128人(30.5%)、コカイン62人(14.8%)、MDMA41人(9.8%)、リタリン40人(9.5%)、睡眠薬19人(4.5%)の順であった。

### 2) 本人の薬物乱用頻度(表9)

本人の薬物乱用もすべての薬物において女性は男性より頻度が高かった。

男性では、乱用頻度が高い順に、ブタン102人(11.7%)、有機溶剤93人(10.7%)、安定剤46人(5.3%)、大麻35人(4.0%)、咳止め液24人(2.8%)、MDMA10人(1.2%)、睡眠薬9人(1.0%)、コカイン8人(0.9%)、覚せい剤3人(0.3%)、リタリン1人(0.1%)であった。

女性では、乱用頻度が高い順に、有機溶剤128人(30.5%)、安定剤73人(17.4%)、ブタン79人(18.8%)、大麻59人(14.0%)、咳止め液43人(10.2%)、覚せい剤29人(6.9%)、MDMA24人(5.7%)、コカイン16人(3.8%)、リタリン9人(2.1%)、睡眠薬8人(1.9%)であった。

各薬物とも無回答者が数ほどいたため乱用頻度の少ない薬物では結果の信頼性に問題がある。男性の場合は有機溶剤、ブタン以外は信頼性に乏しい。女性でもコカイン、睡眠薬やリタリンなどは信頼性が低い。

### 3) 有機溶剤、大麻、覚せい剤の乱用頻度の年代変化(表10、表11)

有機溶剤、大麻、覚せい剤の乱用頻度について、1994年から今回2008年調査までの隔年調査結果を表にまとめた。

有機溶剤乱用は、男性において一貫して減少しており1994年41.2%から2008年には10.7%となった。女性有機溶剤乱用率は男性よりも減少率がゆるやかであったが前回2006年31.1%から2008年30.5%に減少した。

大麻は男性では1994年から2004年まで5%から6%前後、2006年は2.7%であったが、今回4.0%となった。女性では1998年から2006年にかけて14%から15%台であり今回は14.0%であり大きな変化はない。

覚せい剤は男性では1994年1.2%から2000年5.0%まで増加したのち、2002年2.5%、2004年1.6%、2006年0.7%と低下し、今回は0.3%となった。女性では1994年6.6%から1998年16.9%まで増加したが、2000年15.2%から2006年10.9%へと低下傾向であり、今回は6.9%へと低下した。

### 4) 地域ごとの有機溶剤、大麻、覚せい剤の乱用頻度(表12、表13)

有機溶剤、大麻、覚せい剤、ブタンの各種薬物乱用頻度を地域ごとにみてもみた。

男性では、有機溶剤乱用は中部13.3%、東北・北海道13.2%、関西12.7%、九州12.9%などで高かった。大麻乱用は関西7.3%が高かった。ブタン乱用は、九州3.5%が低くその他はいずれも10%いじょうであった。

女性の場合、東北・北海道はいずれの薬物とも乱用頻度が高い。また関西も有機溶剤乱用42.6%

大麻23.8%と高かった。

地域別の検討では、対象数が少なくなるので調査年度による変動が大きくなりやすい。

### 3 有機溶剤、大麻、覚せい剤乱用の意識・実態

#### 1) 有機溶剤

##### ① 周囲の有機溶剤乱用による精神症状発現者(表14)

身近に有機溶剤乱用の結果、病気や異常になった人がいたかどうか訪ねた。

その結果、男性の80人(9.2%)、女性の118人(28.1%)が身近に有機溶剤乱用の結果と思われる異常を訴える人がいたと答えていた。女性に周囲の症状発現者が多かった。

##### ② 有機溶剤入手性(表15)

有機溶剤の入手が困難であるかどうかについて尋ねた。

簡単に手に入るとしたものは、男性では164人(18.9%)、女性では156人(37.1%)であり、女性の方が簡単に手に入るとした者が多かった。

##### ③ 有機溶剤乱用開始年齢(表16)

有機溶剤乱用開始年齢は、男女とも中学1年生あるいは中学2年生である13歳が最も多かった(男性21人(22.6%)、女性42人(32.8%))。続いて14歳、12歳が開始年齢として多かった。

##### ④ 有機溶剤吸引頻度(表17)

有機溶剤を最も乱用していた時期の吸引頻度を尋ねた。「数回以上」が男女それぞれ45人(48.4%)、53人(41.4%)と多かった。「ほとんど毎日」と回答した者は男女それぞれ21人(22.6%)、36人(28.1%)であった。乱用頻度に性差はなかった。

##### ⑤ 有機溶剤乱用への態度(表18,19)

この項目は、男女ごとに有機溶剤乱用経験別に比較した。有機溶剤乱用に対して、「法律で禁じられているから、すべきではないと思う」、「法律で禁じられてはいるが、少々ならかまわないと思う」、「法律で禁じられてはいるが、それを守る必要は全然ないと思う」の3件法で回答してもらった。

「法律で禁じられているからすべきではないと思う」と遵法的に答えた者は、有機溶剤非乱用者

では男性597人(78.9%)、女性188人(67.1%)だったのに対し、有機溶剤乱用者では男性26人(28.0%)、女性28人(21.9%)と少なかった。

一方、「少々ならかまわないと思う」、「法律を守る必要は全然ないと思う」という許容的回答をした者は、乱用者では男性64人(68.8%)および女性90人(70.3%)と多く、一方、非乱用者では男性104人(13.7%)および女性70人(25.0%)と少なかった。

以上、男女とも乱用者は有意に有機溶剤乱用に許容的であった。

##### ⑥ 有機溶剤乱用禁止への態度(表20,21)

法律で有機溶剤乱用を禁止していること自体への意見を尋ねた。「禁止することを当然」としているのは非乱用者では男女それぞれ493人(65.1%)、140人(50.0%)であったのに対し、有機溶剤乱用者では「禁止することを当然」とした者は男女それぞれ35人(37.6%)、30人(23.4%)にすぎなかった。「有機溶剤くらい禁止しなくても良い」「そもそも法律で決める必要はなく、個人の好きにさせればよい」を合わせた有機溶剤乱用に肯定的意見が、有機溶剤乱用者では、男女それぞれ27人(29.0%)、48人(37.5%)あり、非乱用者よりも多かった。

##### ⑦ 有機溶剤の有害性知識(表22,23)

有機溶剤乱用の影響として、急性中毒死、多発神経炎、精神病状態、無動機症候群、フラッシュバックについて尋ねた。

これらの有害性については、精神病状態およびフラッシュバックが有機溶剤乱用の有無にかかわらず男女とも良く知られていた。精神病状態が生じることを知っていた者は、男性では乱用者70人(75.3%)非乱用者487人(64.3%)、女性では乱用者114人(89.1%)、非乱用者221人(78.9%)であった。また、乱用者・非乱用者とも女性の方が男性よりも有害性知識がある傾向にあった。

##### ⑧ 有機溶剤で体験した症状(乱用者)(表24)

有機溶剤による症状としては精神病状態が男性乱用者11人(11.8%)、女性乱用者35人(27.3%)に訴えられていた。フラッシュバックも男性乱用者12人(12.9%)、女性乱用者37人(28.9%)に見られた。無動機症候群や多発神経炎の症状も尋ねている

が、これらは本人の訴えであるので正確な診断ではない。

#### ⑨ 有機溶剤の有害性知識と乱用抑止(表25)

有機溶剤乱用の有害性の知識が有機溶剤乱用を抑止するかどうかを有機溶剤乱用者に尋ねた。「害を知っていたら吸引しなかったと思う」が男性乱用者では23人(24.7%)、女性乱用者では26人(20.3%)であった。一方、「やはりしていたと思う」は男女乱用者それぞれ40人(43.0%)、80人(62.5%)であった。

#### ⑩ 施設退所後、乱用しないと思うか(有機溶剤乱用者のみ)(表26)

今回施設を退所した後有機溶剤を再び乱用すると思うかどうかを乱用者に尋ねた。その結果、「絶対やらないと思う」は男女それぞれ64人(68.8%)、69人(53.9%)であった。一方、「多分やると思う」「絶対やると思う」と答えた者は男性ではどちらも0人、女性ではそれぞれ9人(7.0%)、3人(2.3%)と少なかった。

#### ⑪ 退所後、乱用すると思う理由(退所後「多分やる」「絶対やる」と答えた者のみ)(表27)

上記退所後乱用すると思うと答えた者にその理由を尋ねた。男性では退所後「多分やる」「絶対やる」と答えた者がいなかった。女性では「いやなことがあったらやると思うから」とした者が5人(41.7%)いた。「今もやりたいと思っているから」が7人(58.3%)いた。

## 2) ブタン乱用

#### ① 周囲のブタン乱用による精神症状発現者(表28)

身近にブタン乱用の結果、病気や異常になった人がいたかどうか訪ねた。

その結果、男性の74人(8.5%)、女性の75人(17.9%)が身近にブタン乱用の結果と思われる異常を訴える人がいたと答えていた。女性に周囲のブタンによる症状発現者が多かった。

#### ② ブタン入手困難さ(表29)

ブタンの入手が困難であるかどうかについて尋ねた。

簡単に手に入ると回答したのは、男性では335人

(38.6%)、女性では177人(42.1%)であり、4割前後の者がブタン入手は容易としていた。

#### ③ ブタン乱用開始年齢(表30)

ブタン乱用開始年齢は、13歳が男性33人(32.4%)、女性22人(27.8%)で最も多かった。つづいて14歳、12歳が多かった。11歳以下の男性が10人(9.8%)、女性7人(8.9%)みられた。

#### ④ ブタン乱用頻度(表31)

ブタンを最も乱用していた時期の吸引頻度を尋ねた。「ほとんど毎日」していた経験があるのは、男性37人(36.3%)、女性27人(34.2%)であった。一方、「いままで1,2回」のみと回答した者は男性18人(17.6%)、女性11人(13.9%)であった。ブタン乱用に関しては乱用頻度の性差はないようである。

#### ⑤ ブタン乱用への態度(表32, 33)

男女ごとにブタン乱用経験別に比較した。ブタン乱用についてどう思うかを、「すべきではない」「少々ならかまわないと思う」「かまわないと思う」の3件法で回答してもらった。

「乱用すべきではない」と答えた者は、ブタン非乱用者では男性374人(49.9%)、女性131人(40.2%)だったのに対し、乱用者では男性12人(11.8%)および女性12人(15.2%)と少なかった。非乱用者ではブタン吸引そのものを知らなかった者が男女それぞれ271人(36.2%)、95人(29.1%)と多かった。

#### ⑥ ブタンの有害性知識(表34, 35)

ブタン吸引の影響として、精神病状態、急性中毒死について尋ねた。

非乱用者では、精神病状態および急性中毒死いずれも知らなかった者が男性505人(67.4%)女性198人(60.7%)と多くを占めていた。男性乱用者では精神病状態、急性中毒死を知っていたものはそれぞれ27人(26.5%)、12人(11.8%)であった。女性では、精神病症状について知っていた者は乱用者26人(32.9%)非乱用者88人(27.0%)、急性中毒死について知っていた者は乱用者18人(22.8%)非乱用者67人(20.6%)であった。男女とも有害性の知識は乱用者と非乱用者の間に大きな差はないようであった。

⑦ ブタンで体験した症状(乱用者)(表36)

乱用者において体験した症状を尋ねた。その結果ブタン乱用によって精神病状態を体験した者は男女それぞれ14人(13.7%)、17人(21.5%)であった。フラッシュバック体験率は男女それぞれ22人(21.6%)、13人(16.5%)であった。

⑧ ブタンの有害性知識と抑止(表37)

ブタンの有害性知識がブタン吸引を抑止するかどうか検討するためブタンの有害性を知っていたら乱用しなかったかどうかを乱用者に尋ねた。男性では「害を知っていたら吸引しなかったと思う」と「やはりしていたと思う」がいずれも30%前後でほぼ同じであった。一方、女性では「やはりしていたと思う」41人(51.9%)が「害を知っていたら吸引しなかったと思う」13人(16.5%)よりも多かった。

⑨ 施設退所後、乱用したいと思うか(ブタン乱用者のみ)(表38)

今回施設を退所した後ブタンを再び乱用すると思うかどうかを乱用者に尋ねた。その結果、「多分やると思う」あるいは「絶対やると思う」と答えた者は男性では3人(2.9%)、女性では2人(2.6%)であり、「絶対やらないと思う」は男女それぞれ69人(67.6%)、50人(63.3%)であった。退所後のブタン乱用への気持ちに性差はないようであった。

⑩ 退所後、乱用すると思う理由(「多分やる」「絶対やる」と答えた者のみ)(表39)

退所後乱用すると思うと答えた者にその理由を尋ねた。対象人数が男性3人女性2人とすくなくかった。理由としては少ないが男女とも「今もやりたいと思う」「いやなことがあったらやると思う」などがあげられた。

### 3) 大麻

① 周囲の大麻乱用による精神症状発現者(表40)

身近に大麻乱用の結果、病気や異常になった人がいたかどうか尋ねた。

その結果、男性の71人(8.1%)、女性の100人(23.8%)が身近に大麻乱用の結果と思われる異常を

訴えていた人がいたと答えていた。大麻による周囲の精神症状発現者は女性に多かった。

② 大麻入手性困難さ(表41)

大麻の入手が困難であるかどうかについて尋ねた。

簡単に手に入るとしたものは、男性では69人(7.9%)、女性では79人(18.8%)であり、女性の方が簡単に手に入るとする者が多かった。

③ 大麻の知識(表42)

「大麻を吸う前(使ったことがない人は施設入所前)、大麻についてあなたは どう思っていたか」を尋ねた。「見てみたかった」が男性61人(7.0%)女性61人(14.5%)、「試してみたかった」が男性42人(4.8%)女性52人(12.4%)であった。

④ 大麻の乱用開始年齢(表43)

大麻乱用者に乱用開始年齢を尋ねた。男性では18人(51.5%)女性では24人(40.6%)が13歳から14歳が開始年齢と回答しており、この年代に開始年齢として多かった。

⑤ 最もしていた時の大麻乱用頻度(表44)

大麻乱用経験者に最も吸引していた時期の吸引頻度を尋ねた。「数回以上」が男性18人(51.4%)、女性28人(47.5%)と半数を占めていた。「ほとんど毎日」は男性13人(37.1%)、女性16人(27.1%)みられた。

⑥ 大麻乱用への態度(表45, 46)

大麻を吸うことをどう思っていたかを大麻乱用の有無で比較した。大麻非乱用者は、男性646人(79.3%)、女性220人(63.8%)が、「法律で禁じられているからすべきではないと思う」と答えていた。一方、大麻乱用者では、「すべきではない」とした者が男女それぞれ6人(17.1%)、10人(16.9%)に過ぎなかった。大麻乱用者では「少々ならかまわないと思う」「それを守る必要は全然ない」を合わせた大麻乱用に肯定的意見が男性で28人(80.0%)、女性で45人(76.3%)を占めていた。男女とも乱用者のほうが許容的態度であった。

⑦ 大麻禁止への態度(表47, 48)

法律で大麻を禁止していること自体への意見を

尋ねた。有機溶剤乱用の場合と同様、非乱用者は、「禁止することを当然」としとするものが多い(男性71.5%、女性55.4%)のに対し、大麻乱用者では「禁止することを当然」とした者は少なかった(男性20.0%、女性16.9%)。大麻乱用者では「大麻くらい禁止しなくても良い」「そもそも法律で決める必要はなく、個人の好きにさせればよい」など大麻吸引に肯定的意見が男女それぞれ37.2%、45.8%と多かった。

#### ⑧ 大麻の有害性知識(表49, 50)

大麻吸引の影響として、精神病状態、無動機症候群について尋ねた。全体に乱用者は非乱用者よりも知識があった。乱用者は男女とも60%以上が精神病状態が起こることを知っていた。

#### ⑨ 大麻で体験した症状(乱用者)(表51)

乱用者に大麻による精神症状を尋ねた。精神病状態は男性6人(17.1%)、女性20人(33.9%)にみられた。無動機症候群は男性9人(25.7%)、女性15人(25.4%)にみられた。精神病状態は女性に多かった。

#### ⑩ 大麻の有害性知識と抑止(表52)

大麻吸引の有害性の知識が大麻吸引を抑止するかどうかを検討するため、大麻による害を知っていたら吸引しなかったと思うかどうかを大麻乱用者に尋ねた。

「害を知っていたら吸引しなかったと思う」と答えた大麻乱用者は、男女それぞれ8人(22.9%)、6人(10.2%)にすぎず、「やはりしていたと思う」と答えた者が多かった。

#### ⑪ 施設退所後の大麻使用(大麻乱用者のみ)(表53)

今回施設を退所した後大麻を再び乱用すると思うかどうかを乱用者に尋ねた。その結果、男女ともほとんどの者が「多分やらないと思う」(男性13人(37.1%)、女性24人(40.7%))あるいは「絶対やらないと思う」(男性18人(51.4%)、女性25人(42.4%))と答えていた。

退所後も乱用する理由としては、「今もやりたいと思っているから」「いやなことをあったらやと思う」などがあげられた(表54)。

#### 4) 覚せい剤

##### ① 周囲の覚せい剤乱用による精神症状発現者(表55)

身近に覚せい剤乱用の結果、病気や異常になった人がいたかどうか訪ねた。

その結果、男性の57人(6.6%)、女性の81人(19.3%)が身近に覚せい剤乱用の結果と思われる異常を訴えていた人がいたとしており、女性の周囲で覚せい剤乱用による精神症状発現者が多かった。

##### ② 覚せい剤入手性(表56)

覚せい剤の入手が困難であるかどうかについて尋ねた。

簡単に手に入るとした者は、男性では47人(5.4%)、女性では73人(17.4%)、また少々苦勞するが手に入ると答えた者が男性106人(12.2%)、女性86人(20.5%)であり、女性の方が簡単に手に入るとする者が多かった。

##### ③ 覚せい剤への関心(表57)

「覚せい剤を使う前(使ったことがない人は施設入所前)、覚せい剤についてどう思っていたか」を尋ねた。「見てみたかった」および「試してみたかった」という覚せい剤への関心を示した者が男性の66人(7.6%)、女性の93人(22.1%)を占めた。女性は男性よりも覚せい剤乱用以前から覚せい剤への関心が高かった。

##### ④ 覚せい剤乱用への誘い(表58)

「入所前、覚せい剤の使用を誘われたことがあるかどうか」を尋ねた。男性では21人(2.4%)、女性では76人(18.1%)が覚せい剤乱用に誘われていた。この質問項目では無回答が男女それぞれ283人(32.6%)、104人(24.8%)と多いためその点を考慮する必要がある。

##### ⑤ 覚せい剤の乱用開始年齢(表59)

覚せい剤乱用者にはじめて覚せい剤を乱用した年齢を尋ねた。男性では乱用者が3人と少ないので開始年齢についてははっきりしない。女性では15歳が9人(28.1%)で最も多く、ついで14歳の5人(15.6%)であった。

##### ⑥ 覚せい剤の乱用頻度(表60)

覚せい剤乱用者が最も乱用していた時期にどの程度乱用していたかを尋ねた。男女とも「数回以上」が2人(66.7%)および12人(41.4%)と多かった。一方、女性では「ほとんど毎日」とした者も9人(31.0%)いた。

#### ⑦ 覚せい剤の乱用方法(表61)

乱用方法を「吸引」「注射」「吸引と注射」に分けて尋ねた。吸引のみを乱用方法としてあげた者が女性では18人(62.1%)と最も多かった。古典的使用法である注射のみをあげた者は男女それぞれ1人(33.3%)、4人(13.8%)であった。「吸引と注射」をあげた者は、男女それぞれ1人、5人(17.2%)であった。

#### ⑧ 覚せい剤への態度(表62, 63)

男女別乱用経験別に覚せい剤への態度を比較した。男性では乱用者が少ないため乱用有無別の比較はあまり実がない。男性では約80%が「乱用すべきではない」としている。女性では乱用者29人のうち「少々ならかまわないと思う」11人(37.9%)「それを守る必要は全然ない」8人(27.6%)など覚せい剤乱用に肯定的意見が多く「乱用すべきではない」は8人(27.6%)と少なかった。これに対し女性の非乱用者では「乱用すべきではない」が240人(64.3%)で2/3ほどを占めていた。

#### ⑨ 覚せい剤禁止への態度(表64, 65)

法律で覚せい剤を禁止していること自体への意見を尋ねた。これも男性では乱用者が3人と少ないため乱用有無別の比較は意味がない。男性では「禁止するのは当然である」とする者がおよそ75%であった。女性では乱用者では「禁止するのは当然である」は9人(31.0%)、「そもそも法律で決める必要はなく、個人の好きにさせればよい」という覚せい剤使用に肯定的意見が9人(31.0%)にみられた。一方、女性の非乱用者では「禁止するのは当然である」が209人(56.0%)であった。

#### ⑩ 覚せい剤の有害性知識(表66, 67)

覚せい剤吸引の影響として、精神病状態およびフラッシュバックについて尋ねた。男性では精神病状態およびフラッシュバックについて知っているとした者が40%ほどであった。一方、女性では精神病状態やフラッシュバックについては知って

いる者は乱用者でいずれも21人(72.4%)があった。非乱用者でも60%ほどが有害性の知識があった。

#### ⑪ 覚せい剤の有害性体験率(表68)

覚せい剤乱用者に、精神病状態、フラッシュバックの体験について尋ねた。男性では、乱用者が少ないこともあり、精神病状態、フラッシュバックの体験した者はいなかった。一方、女性では、精神病状態、フラッシュバックの体験した者はそれぞれ15人(51.7%)、11人(37.9%)いた。

#### ⑫ 覚せい剤の有害性知識と抑止(表69)

覚せい剤有害性知識が覚せい剤吸引を抑止するかどうかを覚せい剤乱用者に尋ねた。「害を知っていたら吸引しなかったと思う」が女性4人(13.8%)であった。「やはりしていたと思う」とする者が、女性で19人(65.5%)であり、有害性を知っていても乱用したとするものの方が多かった。

#### ⑬ 施設退所後の乱用可能性(覚せい剤乱用者のみ)(表70)

今回施設を退所した後覚せい剤を再び乱用すると思うかどうかを乱用者に尋ねた。その結果、男性では回答全員「絶対やらないと思う」と答えていた。女性では2人(6.9%)が「多分やると思う」と答えていた。理由については、「今もやりたいと思っているから」と「いやなことがあったらやると思うから」があげられていた(表71)。

## D 考察

### 1 本年度調査の薬物乱用実態

#### 1) 乱用薬物の種類

今年度の調査で、非行児の乱用薬物として多かったのは男性ではブタン102人(11.7%)および有機溶剤93人(10.7%)、女性では有機溶剤128人(30.5%)であった。われわれこれまでの入所非行児調査では男女とも有機溶剤が最も多い乱用薬物であったが、2006年調査以降は男性では有機溶剤乱用よりもブタン乱用の方が多くなっていた。またいわゆる精神安定剤が男性46人(5.3%)女性73人(17.4%)と比較的多い。

薬物乱用で検査された少年数は近年減少している(青少年白書19年版)。特に有機溶剤乱用は199

0年代には2万人以上が検挙されていたが平成18年度は841人と大きく減少している。現在ブタン乱用は青少年の間で相対的に重要な乱用薬物となってきたと思われる。

いわゆる精神安定剤が男性46人(5.3%)女性73人(17.4%)と比較的多い。有機溶剤乱用が以前より減少してきたため安定剤も乱用薬物としては相対的に頻度が高く実態について今後とも把握していく必要があると思われる。安定剤(抗不安薬)についてはこれまで非行児を対象に種類や入手経路などあまり検討してきていない。

男性においてその他の薬物乱用頻度は1%台以下である。この値は未回答者の頻度と変わらずこれらの薬物乱用頻度は信頼性が低いと考えられる。

全体的に薬物乱用が減少してきているため、特に男性では児童自立支援における薬物問題の重要性は相対的に低下していると考えられる。そのため薬物に対する啓蒙教育があまり行われなくなるのではないかと心配される。

## 2) 薬物乱用の性差

入所非行児の薬物乱用の性差については、従来と同様にすべての薬物において男性より女性のほうが乱用率が高くまた乱用者実数も多かった。一方、青少年白によれば、有機溶剤乱用、大麻乱用、覚せい剤乱用により検挙された犯罪少年のうち女性の割合はそれぞれ41.7%、16.7%、64.9%である。つまり大麻のみ著しく男性に多く、有機溶剤はやや男性が多く、覚せい剤は女性が多い。したがって、われわれの調査対象である入所非行児においては、これは検挙された犯罪少年の場合とはやや異なるといえる。

この理由として、一つには女子非行では性非行や薬物非行が重要な入所理由となりやすいことが考えられる。児童保護の観点から、薬物問題は男性より女性で重要となりやすい。児童自立支援施設への入所は児童相談所や家庭裁判所の判断によるので、女性の場合の方が薬物乱用をしたことによって施設入所になる可能性が高いと思われる。

## 3) 薬物乱用の地域差

薬物乱用の頻度を地域ごとの検討した結果、薬物の種類により地域差が認められた。しかし、地域ごとの対象人数はそれほど多くないので乱用率

などの結果の変動は大きい。そのため地域差については断定的なことは言いにくい。

過去の結果を見てみると、2000年度調査では、有機溶剤乱用および覚せい剤乱用頻度は関西地域が高く、ブタン乱用は地域差があまりなかった。2002年調査では北海道・東北地方で有機溶剤乱用、ブタン乱用、大麻乱用などが多かった。2004年度は東北・北海道では全般に各種の薬物乱用が多く九州は有機溶剤乱用がおもな乱用薬物であり他の乱用薬物は比較的少ないという結果であった。

2006年度は男性よりも女性で地域差があるようで関東および関西で多少薬物乱用率が高いという結果であった。

## 2 薬物乱用の年代変化

乱用頻度の年代変化は回答数や回答施設の変動の影響を受ける。これまで調査対象数は大体1200人から1300人ほどである。前回2006年調査では対象数が986人とやや少なかったが、今回は回答者数1300人台となった。このような回答率の変動を考慮し結果の解釈には注意が必要である。また薬物乱用には地域差があるので回答する施設が調査ごとに異なるとその影響も出てくるとと思われる。さらに対象者のうち1年以上入所している者が30%以上いる。これらの対象者では1年以上前の薬物経験を訪ねていることになるので警察統計の年度と直接比較し評価することは難しい。

以上を考慮したうえで有機溶剤乱用、大麻乱用、覚せい剤乱用の年次変化についておよそ下記のとおりである。

### 1) 有機溶剤

男性では1994年度調査より有機溶剤乱用は一貫して減少しており、1994年度から今回2008年まで2年おきに41.2%、37.3%、30.3%、26.4%、21.6%、14.3%、9.8%、10.7%となっている。

一方、女性も減少傾向にあるが男性ほど顕著でない。女性では、1994年から1998年までの59.6%、50.6%、48.5%と減少したが、2000年は52.3%とやや上昇し、その後2002年46.5%、2004年44.2%、2006年31.1%、2008年30.5%と減少してきている。

警察白書によれば有機溶剤乱用により検挙された少年数は1991年ごろは2万人前後であったがそ



の後漸減し、平成18年には841人までに減少した。この傾向は児童自立支援施設入所非行児の有機溶剤乱用者数の動向は検挙少年数との変化と相關していると思われる。児童自立支援施設入所児童の有機溶剤乱用率が今後とも減少していくか継続的調査が必要である。

## 2) 大麻

大麻乱用は、男性では1994年および1996年は5.5%、6.7%であったが、1998年から2004年まではほぼ5%前後で変化していなかった。2006年は2.7%と低下したがこの2008年は4.0%であった。女性では、1994年から1998年まで22.0%、19.0%、14.4%と漸減し、2000年以降は14%から15%台であり、今回も14.0%とあまり変化していない。

全体としてみるとこの10年ほど児童自立支援施設入所児の大麻乱用は有機溶剤乱用と比較すると大きな変化はなく、男性では4%から5%、女性では14%から15%である。

## 3) 覚せい剤

警察白書によれば、検挙された覚せい剤乱用少年は1990年代中頃より増加し、その後1998年より減少傾向にある。このような傾向と同様に、児童自立支援施設調査の覚せい剤乱用頻度も、男性では1994年1.2%から2000年5.0%まで増加傾向にあり、2002年度に2.5%へと始めて減少し、2004年1.6%、2006年0.7%、今回2008年0.3%となった。女性では1994年6.6%から1998年16.9%まで急増し、その後は減少傾向を示し2008年6.9%となった。全般に覚せい剤乱用は一時増加したが、ここ数年は減少傾向にあるといえよう。

## 3 対象者の特性の変化

今回の調査より、有機溶剤乱用の減少がはっきりしてきた。原因のひとつには単純に有機溶剤が乱用薬物として好まれなくなったことが考えられる。その他有機溶剤乱用減少に関連すると思われる要因として、有機溶剤乱用への態度、有機溶剤乱用への知識、入所児童の非行性そのものの変化なども考えられる。以下従来のわれわれの調査結果もふまえて、有機溶剤乱用頻度の減少に対する態度などの要因の影響を検討する。

### 1) 薬物乱用に対する態度

従来調査と同様に、今回対象薬物について、各薬物の乱用についてどう思うか、および法律で薬物乱用を禁止していることをどう思うかを尋ねた。全体として従来結果とほぼ同様な結果が得られた。すなわち、乱用者は非乱用者よりも薬物乱用に許容的であり、また乱用を法律で禁止する必要はなく個人の好きにすればよいと考える傾向にある。また、乱用者、非乱用者に限らず女性の方が男性より薬物乱用に許容的である。

縦断的にみても「法律で禁じられているから、有機溶剤を乱用すべきではないと思う」と答えた者の割合は、1998年には男性67.6%女性53.1%であり、今年2008年度は男性71.7%女性51.4%であった。この間有機溶剤乱用頻度は大きく減少したのに対して有機溶剤乱用への態度は変化していないといえる。

また法律で有機溶剤乱用を禁止していることについて「禁止することを当然」「禁止するのは仕方ない」と回答したものの割合は、1998年には男性78.3%女性71.2%であり、2008年度は男性74.2%女性61.9%であった。法律で禁止されていることに対する態度も変化していないといえる。

これらより、近年の入所児童における有機溶剤乱用頻度の減少と有機溶剤乱用に対する態度はあまり関係がないと思われる。確かに乱用別にみると乱用者は非乱用者よりも薬物乱用に許容的である薬物乱用と乱用への態度は関連があるが、有機溶剤に対する態度は乱用頻度の年代変化を説明するものではないようである。

### 2) 薬物の有害性知識

具体的有害性知識が乱用前からあったら乱用しなかったかどうかという、有害性知識と乱用抑止の関係も前回同様に検討した。その結果、やはり前回同様な傾向にあった。結果に示したとおり、もし有害性を知っていたら使用しなかったと答えた者は少なく、大多数は有害性知識があっても使用したと答えている。これは、単なる知識としての啓蒙教育で防げるの薬物乱用は全体の一部に過ぎないことを予測させる。ただ、今回も薬物の害について質問紙で簡単に尋ねただけなので、十分な啓蒙教育を実際に実施にその前後で態

度の変化を測定しなければ教育による態度変容の効果を判定することは難しい。

このことより近年の有機溶剤乱用の低下は有機溶剤の害知識にそれほど関係していないことが考えられる。有機溶剤による精神病状態について知っている者は1998年男性63.6%女性82.2%、2008年男性70.0%女性80.0%であった。またフラッシュバックについては1998年男性40.6%女性50.2%、2008年男性54.0%女性72.4%であった。これらより精神病状態についてはあまり変化はないがフラッシュバックの知識はやや増加している。

これらより有機溶剤の害知識も特に近年の有機溶剤乱用頻度減少を説明するものではないと思われる。

### 3) 非行歴

入所児童の非行性そのものの変化が薬物乱用頻度と関連していることが考えられる。そこで代表的な非行行動として「恐喝・ひったくり」「不良交友」「傷害」の頻度を以前の調査結果と比較した。

「傷害」は1998年男性70.0%女性57.1%、2008年調査では男性61.0%女性55.7%であった。やや減少傾向かあまり変わらないように見える。「不良交友」は1998年男性69.4%女性80.5%、2008年調査では男性52.6%女性67.4%であった。やはりこれもやや減少傾向にあるようである。「恐喝・ひったくり」は1998年男性59.6%女性54.4%、2008年調査では男性29.9%女性33.6%であった。これも減少傾向にある。

1998年より児童自立支援施設は教護院より名称変更され、施設目的も非行性の除去だけでなく自立への援助が必要な児童への対応となってきた。そのため以前より入所児童の非行度は低下している可能性が示唆される。有機溶剤乱用頻度の減少もこのような入所児童の非行性の低下と一部関連しているのかもしれない。しかし薬物によって乱用頻度が大きく減少しているものとそうでないものがあり乱用と非行性全体の関連ははっきりはしない。一方、家庭裁判所への係属率などはそれほど変化しておらず、一概に非行性が低下しているとも言いきれず、薬物乱用との関連は断定できない。

今後母集団としての入所児童の特性変化に注意しながら薬物乱用調査をしていく必要があると思

われる。

## 4 方法論上の問題点

### 1) 対象者の特性

本研究は児童自立支援施設入所非行児の薬物乱用の実態調査であるが、前述のとおり入所児童の特性が以前と変化している可能性がある。今回入所児童のいくつかの非行行動は薬物乱用に限らず次第に減少していることが示唆されている。

施設関係者の間では入所児童が以前ほどいわゆる反社会性が目立たなくなってきたと言われている。特に1998年に教護院から児童自立支援施設へと名称変更になり、同時に施設目的がかつての教護院時代の非行性除去ではなく児童への支援となり、さらに入所児童が変化してきていると考えられる。入所児童はおもに反社会性の高い非行児童であるが、非社会的であったり精神障害を伴い不適応を起こしていたりする児童が増えてきているといわれている。

以前よりも非行性の軽い児童が多く入所するようになってきているとすると、当然薬物非行もそれに伴い減少している可能性がある。したがって入所児童の特性の変化に注意しながら今後の継続的調査を進めていく必要がある。

### 2) 対象数の変動

われわれの全国児童自立支援施設薬物乱用実態調査の回答数は、1994年以降1200人から1300人前後である。2006年調査では986人とやや少なくなったが、今回有効回答数1289人であり従来どおりの調査人数であった。人数が少ないと地域差による変動なども受けやすく結果の信頼性も低下する。本調査は比較的質問数が少ないとはいえ、児童および施設にとって調査協力はやはり負担であると思われるので、次回以降の調査でも回答数が極端に減少しないよう配慮した研究計画を作成していく予定である。

### 3) 無回答率の問題

無回答を減らすために無記名式の質問紙調査としているが、質問内容が薬物乱用という反社会行動であるため無回答が多くなることが予想される。今回の調査で各薬物の乱用経験について2%から5%が無回答であった。乱用率が数%程度の薬物では乱用頻度と無回答率が変らないこととな

る。無回答者においては薬物乱用者が多い可能性があるため、特に乱用率の低い薬物では乱用率の信頼性が乏しくなる。男性では女性よりも薬物乱用が少ないため有機溶剤およびブタン以外の薬物は乱用頻度の信頼性が低い。

## 5 今後の課題

### 1) 調査対象数の問題

今回調査の有効回答者数は1289人、施設参加率は84.2%であった。しかし前回2006年調査は施設参加がやや少なかった。年度による施設の調査参加率の変動が大きいと結果の信頼性が低下するので今後とも施設回答率が一定以上保たれるようにする必要がある。ひとつにはやはり調査が施設や児童の抵抗を引き起こさないような内容であることに注意しなければならない。現在でも薬物乱用への質問は無用な関心を引き起こしたり過去の非行を思い出させたりして良くないと考えられる場合があるようである。これらの点に配慮しつつ必要な事柄を聴ける質問紙にしていけることが望まれる。また調査時期が適切かどうかの問題もある。同時期に他の調査の依頼、入所児童の生活態度・状況、施設行事等により調査に参加しにくくなることもある。これらの点を考慮して今後の調査計画を立てる必要があると感がえられる。

### 2) 非行少年における薬物乱用の減少に対する対応

現在でも女性入所児童において、有機溶剤乱用は30%ほどの認められ、施設入所中の薬物教育は重要である。しかし、男性入所児童において有機溶剤乱用者は激減した。また以前は薬物乱用と言えば有機溶剤と覚せい剤であったが、今は多様な薬物が使用されている。使用される薬物が多様であると、その有害性の説明も多様になるであろうし、入手経路などもまた多様になるであろう。一般的な薬物教育は変わらないと思われるが、施設としては多くの乱用薬物に教育することが難しくなっているかもしれない。そもそも薬物非行が目立たなくなると薬物教育そのものがおざなりになることも危惧される。薬物乱用児童にとって施設入所中は薬物教育を受けられる良い機会でありこの間に適切な教育を受けられるかどうかは施設退所後の薬物乱用再発にとって重要と思われる。

非行少年における薬物乱用は有機溶剤乱用中心

から多様になってきており、今後そのような変化に合わせた調査や啓蒙教育が必要と思われる。ブタンや医薬品その他薬物を考慮して調査を継続していく必要がある。

## 謝辞

本研究は、全国の児童自立支援施設の多くの方々のご協力により実施ができました。ご協力いただいた方々にここで深謝させていただきます。

## 参考文献

- 3) 阿部恵一郎：児童福祉施設(教護院)における有機溶剤乱用少年・少女の実態調査。平成6年度厚生科学研究費補助金「麻薬等総合対策研究事業」薬物依存研究の社会的、精神医学的特徴に関する研究 平成6年度研究結果報告書。1995
- 4) 庄司正実：全国の児童自立支援施設における薬物依存の意識・実態に関する研究 平成10年度厚生科学研究「薬物乱用・依存等の疫学的研究及び中毒性精神病患者等に対する適切な医療のあり方についての研究」。1999
- 5) 庄司正実：全国の児童自立支援施設における薬物依存の意識・実態に関する研究 平成12年度厚生科学研究「薬物乱用・依存等の実態把握に関する研究及び社会経済的損失に関する研究」。2001
- 6) 庄司正実：全国の児童自立支援施設における薬物依存の意識・実態に関する研究 平成14年度厚生科学研究「薬物乱用・依存等の実態把握に関する研究及び社会経済的損失に関する研究」。2003
- 7) 庄司正実：全国の児童自立支援施設における薬物依存の意識・実態に関する研究 平成16年度厚生科学研究「薬物乱用・依存の実態とその社会的影響・対策に関する研究」。2005
- 8) 庄司正実：全国の児童自立支援施設における薬物依存の意識・実態に関する研究 平成18年度厚生科学研究「薬物乱用・依存の実態とその社会

的影響・対策に関する研究」, 2005

9) 平成13年度警察白書, 警察庁編, 2002

10) 平成19年版青少年白書 内閣府編 2007

E. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

F. 知的財産権の出願・登録状況

なし

表1 性・学年構成

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
小学 4年以下	10	1.2	1	0.2
小学 5年	13	1.5	3	0.7
小学 6年	34	3.9	2	0.5
中学 1年	89	10.2	37	8.8
中学 2年	247	28.4	103	24.5
中学 3年	364	41.9	190	45.2
高校(専門学校)	17	2.0	11	2.6
高校(専門学校)	16	1.8	8	1.9
高校(専門学校)	8	0.9	5	1.2
無職	47	5.4	34	8.1
就労中	3	0.3	7	1.7
無回答ほか	21	2.4	19	4.5
計	869	100.0	420	100.0

表2 性・年齢構成

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
9歳以下	5	0.6	0	0.0
10歳	5	0.6	4	1.0
11歳	26	3.0	0	0.0
12歳	58	6.7	10	2.4
13歳	139	16.0	60	14.3
14歳	304	35.0	148	35.2
15歳	248	28.5	140	33.3
16歳	34	3.9	31	7.4
17歳	33	3.8	13	3.1
18歳	9	1.0	9	2.1
19歳以上	1	0.1	0	0.0
無回答ほか	7	0.8	5	1.2
計	869	100.7	420	100.0

表3 施設入所期間

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
3ヶ月以下	164	18.9	99	23.6
4ヶ月から6ヶ月	144	16.6	88	21.0
6ヶ月から1年	215	24.7	98	23.3
1年以上1年未満	149	17.1	69	16.4
1年以上1年以上	93	10.7	27	6.4
2年以上	104	12.0	39	9.3
無回答		0.0		0.0
計	869	100.0	420	100.0

表4 地域別人数

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
東北・北海道	91	10.5	54	12.9
関東	216	24.9	88	21.0
中部	75	8.6	32	7.6
関西	205	23.6	101	24.0
中国・四国	111	12.8	58	13.8
九州	85	9.8	42	10.0
不詳	86	9.9	45	10.7
計	869	100.0	420	100.0

表5 非行歴

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
学校をさぼった	604	69.5	355	84.5
外泊や家出をした	582	67.0	358	85.2
自転車を盗んだ	534	61.4	281	66.9
人の物やお金を盗んだ	550	63.3	284	67.6
人にけがをさせた	530	61.0	234	55.7
家からお金を持ち出し	477	54.9	258	61.4
不良仲間とつき合った	457	52.6	283	67.4
家の中で暴れた	345	39.7	190	45.2
人の物やみんなの物を バイクや自動車を盗んだ	328	37.7	178	42.4
ひったくり、カツアゲ	279	32.1	169	40.2
無免許運転	260	29.9	141	33.6
物や家に火をつけた	285	32.8	158	37.6
物や家に火をつけた	276	31.8	104	24.8
根性焼きや入墨をした	251	28.9	136	32.4
性関係のこと	218	25.1	218	51.9
その他	153	17.6	96	22.9
暴力団とつき合った	90	10.4	106	25.2
暴走族に入った	61	7.0	50	11.9

表6 初発非行年齢

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
小学校入学前	67	7.7	12	2.9
小学 1年	67	7.7	29	6.9
小学 2年	75	8.6	26	6.2
小学 3年	90	10.4	35	8.3
小学 4年	90	10.4	46	11.0
小学 5年	116	13.3	50	11.9
小学 6年	104	12.0	57	13.6
中学 1年	125	14.4	91	21.7
中学 2年	52	6.0	37	8.8
中学 3年	7	0.8	4	1.0
中学卒業後	4	0.5	2	0.5
無回答	72	8.3	31	7.4
計	869	100.0	420	100.0

表7 家庭裁判所への係属歴

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
ある	181	20.8	82	19.5
ない	433	49.8	183	43.6
無回答	79	9.1	23	5.5

表8 周囲の薬物乱用状況

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
有機溶剤	245	28.2	244	58.1
大麻	129	14.8	153	36.4
覚せい剤	96	11.0	154	36.7
ガス	199	22.9	165	39.3
コカイン	23	2.6	62	14.8
リタリン	22	2.5	40	9.5
睡眠薬	14	1.6	19	4.5
安定剤	120	13.8	154	36.7
咳止め液	85	9.8	128	30.5
MDMA	28	3.2	41	9.8
その他	36	4.1	48	11.4

表9 本人の薬物乱用歴

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
有機溶剤	93	10.7	128	30.5
大麻	35	4.0	59	14.0
覚せい剤	3	0.3	29	6.9
ガス	102	11.7	79	18.8
コカイン	8	0.9	16	3.8
リタリン	1	0.1	9	2.1
睡眠薬	9	1.0	8	1.9
安定剤	46	5.3	73	17.4
咳止め液	24	2.8	43	10.2
MDMA	10	1.2	24	5.7
その他	12	1.4	20	4.8

表10 有機溶剤・大麻・覚せい剤の乱用頻度の年代変化(男性)

	単位:%							
	1994	1996	1998	2000	2002	2004	2006	2008
有機溶剤	41.2	37.3	30.3	26.4	21.6	14.3	9.8	10.7
大麻	5.5	6.7	4.8	5.0	4.9	4.9	2.7	4.0
覚せい剤	1.2	1.7	3.9	5.0	2.5	1.6	0.7	0.3

表11 有機溶剤・大麻・覚せい剤の乱用頻度の年代変化(女性)

	単位:%							
	1994	1996	1998	2000	2002	2004	2006	2008
有機溶剤	59.6	50.6	48.5	52.3	46.5	44.2	31.1	30.5
大麻	22.0	19.0	14.4	14.7	15.9	15.9	14.0	14.0
覚せい剤	6.6	10.8	16.9	15.2	13.6	12.4	10.9	6.9

表12 地域別薬物乱用頻度(男性)

	有機溶剤	大麻	覚せい剤	ブタン
	東北・北海道(n=91)	13.2%	4.4%	0.0%
関東(n=216)	7.9%	3.2%	0.0%	12.5%
中部(n=75)	13.3%	2.7%	1.3%	10.7%
関西(n=205)	12.7%	7.3%	0.5%	12.7%
中国・四国(n=111)	4.5%	0.9%	0.0%	11.7%
九州(n=85)	12.9%	3.5%	0.0%	3.5%

表13 地域別薬物乱用頻度(女性)

	有機溶剤	大麻	覚せい剤	ブタン
	東北・北海道(n=54)	31.5%	16.7%	11.1%
関東(n=88)	23.9%	2.3%	3.4%	17.0%
中部(n=32)	6.3%	9.4%	3.1%	15.6%
関西(n=101)	42.6%	23.8%	5.9%	15.8%
中国・四国(n=58)	22.4%	8.6%	1.7%	12.1%
九州(n=45)	35.7%	9.5%	7.1%	19.0%

表14 自分の周囲の有機溶剤乱用による精神症状発現者

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
いた	80	9.2	118	28.1
いない	757	87.1	286	68.1
無回答	32	3.7	16	3.8

表15 有機溶剤入手困難さ

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
簡単に手に入る	164	18.9	156	37.1
少々苦労するが、なんとか手に入る	91	10.5	55	13.1
ほとんど不可能だ	73	8.4	23	5.5
絶対不可能だ	295	33.9	60	14.3
無回答	246	28.3	126	30.0

表16 有機溶剤乱用開始年齢(乱用者のみ)

	男性(n=93)		女性(n=128)	
	人数	%	人数	%
10歳以下	5	5.4	3	2.3
11歳	4	4.3	6	4.7
12歳	16	17.2	20	15.6
13歳	21	22.6	42	32.8
14歳	15	16.1	26	20.3
15歳以上	2	2.2	3	2.3
経験はあるが年齢はおぼえていない	4	4.3	11	8.6
無回答	26	28.0	17	13.3

表17 最もしていた時の有機溶剤乱用頻度(乱用者のみ)

	男性(n=93)		女性(n=128)	
	人数	%	人数	%
今まで1, 2回数回以上	22	23.7	14	10.9
ほとんど毎日	45	48.4	53	41.4
無回答	21	22.6	36	28.1
無回答	5	5.4	25	19.5

表18 有機溶剤乱用への態度(男性)

	有機溶剤乱用			
	乱用者(n=93)		非乱用者(n=757)	
	人数	%	人数	%
法律で禁じられているから、すべきではないと思う	26	28.0	597	78.9
法律で禁じられてはいないが、少々ならかまわないと思う	44	47.3	54	7.1
法律で禁じられてはいないが、それを守る必要は全然ないと思う	20	21.5	50	6.6
無回答	3	3.2	56	7.4

表19 有機溶剤乱用への態度(女性)

	有機溶剤乱用			
	乱用者(n=128)		非乱用者(n=280)	
	人数	%	人数	%
法律で禁じられているから、すべきではないと思う	28	21.9	188	67.1
法律で禁じられてはいないが、少々ならかまわないと思う	51	39.8	48	17.1
法律で禁じられてはいないが、それを守る必要は全然ないと思う	39	30.5	22	7.9
無回答	10	7.8	22	7.9

表20 有機溶剤乱用禁止への態度(男性)

	有機溶剤乱用			
	乱用者(n=93)		非乱用者(n=757)	
	人数	%	人数	%
当然だと思う	35	37.6	493	65.1
しかたないことだと思う	29	31.2	88	11.6
シンナーくらい禁止しなくてもいいのではないかなと思う	11	11.8	9	1.2
法律で決める必要はなく、個人の好きにさせればよいと思う	16	17.2	75	9.9
無回答	2	2.2	92	12.2

表21 有機溶剤乱用禁止への態度(女性)

	有機溶剤乱用			
	乱用者(n=128)		非乱用者(n=280)	
	人数	%	人数	%
当然だと思う	30	23.4	140	50.0
しかたないことだと思う	40	31.3	50	17.9
シンナーくらい禁止しなくてもいいのではないかなと思う	14	10.9	14	5.0
法律で決める必要はなく、個人の好きにさせればよいと思う	34	26.6	41	14.6
無回答	10	7.8	35	12.5

表22 有機溶剤の知識(男性)

	有機溶剤乱用			
	乱用者(n=93)		非乱用者(n=757)	
	人数	%	人数	%
急性中毒死	31	33.3	254	33.6
多発神経炎	34	36.6	279	36.9
精神病状態	70	75.3	487	64.3
無動機症候群	41	44.1	259	34.2
フラッシュバック	65	69.9	405	53.5
いずれも知らなかった	10	10.8	160	21.1

表23 有機溶剤の知識(女性)

	有機溶剤乱用			
	乱用者(n=128)		非乱用者(n=280)	
	人数	%	人数	%
急性中毒死	55	43.0	116	41.4
多発神経炎	67	52.3	132	47.1
精神病状態	114	89.1	221	78.9
無動機症候群	78	60.9	137	48.9
フラッシュバック	106	82.8	198	70.7
いずれも知らなかった	6	4.7	34	12.1

表24 有機溶剤で体験した症状(有機溶剤乱用者)

	男性乱用者(n=93)		女性乱用者(n=128)	
	人数	%	人数	%
精神病状態	11	11.8	35	27.3
フラッシュバック	12	12.9	37	28.9
多発神経炎	5	5.4	8	6.3
無動機症候群	8	8.6	38	29.7

表25 有機溶剤の薬害知識と乱用抑止(有機溶剤乱用者)

	男性乱用者(n=93)		女性乱用者(n=128)	
	人数	%	人数	%
しなかったと思う	23	24.7	26	20.3
やはりしていたと思う	40	43.0	80	62.5
無回答	24	25.8	14	10.9

表26 施設退所後、乱用しないと思うか(有機溶剤乱用者)

	男性乱用者(n=93)		女性乱用者(n=128)	
	人数	%	人数	%
絶対やらないと思う	64	68.8	69	53.9
多分やらないと思う	27	29.0	44	34.4
多分やると思う	0	0.0	9	7.0
絶対やると思う	0	0.0	3	2.3
無回答	2	2.2	3	2.3

表27 退所後、乱用すると思う理由(退所後「多分やる」「絶対や

	男性乱用者(N=0)		女性乱用者(N=12)	
	人数		人数	%
誘われたらやると思うから			2	16.7
今もやりたいと思っているから			7	58.3
いやなことがあったらやると思うから			5	41.7
なんとなくそう思うから			3	25.0

表28 自分の周囲のブタン乱用による精神症状発現者

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
いた	74	8.5	75	17.9
いない	763	87.8	327	77.9
無回答	32	3.7	18	4.3

表29 ブタン入手困難さ

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
簡単に手に入る	335	38.6	177	42.1
少々苦勞するが、なんとか手に入る	54	6.2	28	6.7
ほとんど不可能だ	56	6.4	27	6.4
絶対不可能だ	222	25.5	66	15.7
無回答	202	23.2	122	29.0

表30 ブタン乱用開始年齢(乱用者のみ)

	男性(n=102)		女性(n=79)	
	人数	%	人数	%
10歳以下	1	1.0	3	3.8
11歳	9	8.8	4	5.1
12歳	15	14.7	7	8.9
13歳	33	32.4	22	27.8
14歳	17	16.7	15	19.0
15歳以上	1	1.0	2	2.5
経験はあるが年齢はおぼえていない	4	3.9	7	8.9
無回答	22	21.6	19	24.1

表31 最もしていた時のブタン乱用頻度(乱用者のみ)

	男性(n=102)		女性(n=79)	
	人数	%	人数	%
今まで1, 2回	18	17.6	11	13.9
数回以上	37	36.3	26	32.9
ほとんど毎日	37	36.3	27	34.2
無回答	10	9.8	15	19.0

表32 ブタン乱用への態度(男性)

	ブタン乱用			
	経験有(n=102)		経験無(n=749)	
	人数	%	人数	%
すべきではないと思う ブタン乱用はよくない	12	11.8	374	49.9
かまわない	40	39.2	45	6.0
知らなかった	32	31.4	26	3.5
無回答	9	8.8	271	36.2
無回答	9	8.8	32	4.3

表33 ブタン乱用への態度(女性)

	ブタン乱用			
	経験有(n=79)		経験無(n=326)	
	人数	%	人数	%
すべきではないと思う ブタン乱用はよくない	12	15.2	131	40.2
かまわない	26	32.9	51	15.6
知らなかった	27	34.2	31	9.5
無回答	8	10.1	95	29.1
無回答	6	7.6	18	5.5

表34 ブタンの知識(男性)

	ブタン乱用			
	経験有(n=102)		経験無(n=749)	
	人数	%	人数	%
精神病状態	27	26.5	154	20.6
急性中毒死	12	11.8	118	15.8
いずれも知らなかった	61	59.8	505	67.4

表35 ブタンの知識(女性)

	ブタン乱用			
	経験有(n=79)		経験無(n=326)	
	人数	%	人数	%
精神病状態	26	32.9	88	27.0
急性中毒死	18	22.8	67	20.6
いずれも知らなかった	35	44.3	198	60.7

表36 ブタンで体験した症状(乱用者のみ)

	男性乱用者(n=102)		女性乱用者(n=79)	
	人数	%	人数	%
精神病状態	14	13.7	17	21.5
フラッシュバック	22	21.6	13	16.5

表37 ブタンの知識と乱用抑止(乱用者のみ)

	男性乱用者(n=102)		女性乱用者(n=79)	
	人数	%	人数	%
しなかったと思う	37	36.3	13	16.5
やはりしていたと思う	34	33.3	41	51.9
無回答	31	30.4	26	32.9

表38 施設退所後、乱用しないと思うか(ブタン乱用者のみ)

	男性乱用者(n=102)		女性乱用者(n=79)	
	人数	%	人数	%
絶対やらないと思う	69	67.6	50	63.3
多分やらないと思う	25	24.5	25	31.6
多分やると思う	3	2.9	1	1.3
絶対やると思う	0	0.0	1	1.3
無回答	5	4.9	2	2.5

表39 退所後、乱用すると思う理由(退所後「多分やる」「絶対やる」)

	男性乱用者(n=3)		女性乱用者(n=2)	
	人数	%	人数	%
誘われたらやると思うから	0	0.0	0	0.0
今もやりたいと思っ ているから	2	66.7	0	0.0
いやなことがあったらや ると思うから	0	0.0	2	100.0
なんとなくそう思うから	1	33.3	0	0.0



表40 自分の周囲の大麻乱用による精神症状発現者

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
いた	71	8.2	100	23.8
いない	761	87.6	304	72.4
無回答	37	4.3	16	3.8

表41 大麻入手困難さ

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
簡単に手に入る	69	7.9	79	18.8
少々苦労するが、なんとか手に入る	111	12.8	78	18.6
ほとんど不可能だ	103	11.9	36	8.6
絶対不可能だ	385	44.3	110	26.2
無回答	201	23.1	117	27.9

表42 大麻の知識

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
知らなかった	244	28.1	64	15.2
関心がなかった	447	51.4	210	50.0
見てみたかった	61	7.0	61	14.5
試してみたかった	42	4.8	52	12.4
無回答	75	8.6	33	7.9

表43 大麻乱用開始年齢(乱用者のみ)

	男性(n=35)		女性(n=59)	
	人数	%	人数	%
10歳以下	3	8.6	6	10.2
11歳	1	2.9	2	3.4
12歳	2	5.7	0	0.0
13歳	3	8.6	11	18.6
14歳	15	42.9	13	22.0
15歳以上	6	17.1	16	27.1
経験はあるが年齢はおぼえていない	0	0.0	5	8.5
無回答	5	14.3	6	10.2

表44 最もしていた時の大麻乱用頻度(乱用者のみ)

	男性(n=35)		女性(n=59)	
	人数	%	人数	%
今まで1, 2回	4	11.4	6	10.2
数回以上	18	51.4	28	47.5
ほとんど毎日	13	37.1	16	27.1
無回答	0	0.0	9	15.3

表45 大麻乱用への態度(男性)

	大麻乱用			
	経験有(n=35)		経験無(n=815)	
	人数	%	人数	%
法律で禁じられているから、すべきではないと思う	6	17.1	646	79.3
法律で禁じられてはいるが、少々ならかまわないと思う	19	54.3	59	7.2
法律で禁じられてはいるが、それを守る必要は全然ないと思う	9	25.7	41	5.0
無回答	1	2.9	69	8.5

表46 大麻乱用への態度(女性)

	大麻乱用			
	経験有(n=59)		経験無(n=345)	
	人数	%	人数	%
法律で禁じられているから、すべきではないと思う	10	16.9	220	63.8
法律で禁じられてはいるが、少々ならかまわないと思う	28	47.5	59	17.1
法律で禁じられてはいるが、それを守る必要は全然ないと思う	17	28.8	35	10.1
無回答	4	6.8	31	9.0

表47 大麻乱用禁止への態度(男性)

	大麻乱用			
	経験有(n=35)		経験無(n=815)	
	人数	%	人数	%
当然だと思う	7	20.0	583	71.5
しかたないことだと思う	12	34.3	72	8.8
大麻くらい禁止しなくてもいいのではないかと 思う	5	14.3	10	1.2
法律で決める必要はなく、個人の好きにさせればよいと思う	8	22.9	66	8.1
無回答	3	8.6	84	10.3

表48 大麻乱用禁止への態度(女性)

	大麻乱用			
	経験有(n=59)		経験無(n=345)	
	人数	%	人数	%
当然だと思う	10	16.9	191	55.4
しかたないことだと思う	19	32.2	66	19.1
大麻くらい禁止しなくてもいいのではないかと 思う	8	13.6	8	2.3
法律で決める必要はなく、個人の好きにさせればよいと思う	19	32.2	49	14.2
無回答	3	5.1	31	9.0

表49 大麻の知識(男性)

	大麻乱用			
	経験有(n=35)		経験無(n=815)	
	人数	%	人数	%
精神病状態	21	60.0	320	39.3
無動機症候群	11	31.4	175	21.5
いずれも知らなかった	12	34.3	436	53.5

表50 大麻の知識(女性)

	大麻乱用			
	経験有(n=59)		経験無(n=345)	
	人数	%	人数	%
精神病状態	37	62.7	170	49.3
無動機症候群	27	45.8	109	31.6
いずれも知らなかった	17	28.8	140	40.6

表51 大麻で体験した症状(乱用者のみ)

	男性乱用者(n=35)		女性乱用者(n=59)	
	人数	%	人数	%
精神病状態	6	17.1	20	33.9
無動機症候群	9	25.7	15	25.4

表52 大麻の知識と乱用抑止(乱用者のみ)

	男性乱用者(n=35)		女性乱用者(n=59)	
	人数	%	人数	%
しなかったと思う	8	22.9	6	10.2
やはりしていたと思う	19	54.3	42	71.2
無回答	4	11.4	6	10.2

表53 施設退所後、乱用しないと思うか(乱用者のみ)

	男性乱用者(n=35)		女性乱用者(n=59)	
	人数	%	人数	%
絶対やらないと思う	18	51.4	25	42.4
多分やらないと思う	13	37.1	24	40.7
多分やると思う	2	5.7	5	8.5
絶対やると思う	0	0.0	4	6.8
無回答	2	5.7	1	1.7

表54 退所後、乱用すると思う理由(退所後「多分やる」「絶対や

	男性乱用者(n=2)		女性乱用者(n=9)	
	人数	%	人数	%
誘われたらやると思うから	0	0.0	0	0.0
今もやりたいと思っているから	2	100.0	0	0.0
いやなことがあったらやると思うから	0	0.0	2	22.2
なんとなくそう思うから	1	50.0	0	0.0

表55 自分の周囲の覚せい剤乱用による精神症状発現者

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
いた	57	6.6	81	19.3
いない	769	88.5	187	44.5
無回答	43	4.9	25	6.0

表56 覚せい剤の入手性

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
簡単に手に入る	47	5.4	73	17.4
少々苦勞するが、なんとか手に入る	106	12.2	86	20.5
ほとんど不可能だ	110	12.7	38	9.0
絶対不可能だ	396	45.6	106	25.2
無回答	210	24.2	117	27.9

表57 覚せい剤への関心

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
死にたいとは思っていない	200	23.0	49	11.7
関心がなかった	510	58.7	225	53.6
見てみたかった	53	6.1	58	13.8
試してみたかった	13	1.5	35	8.3
無回答	93	10.7	53	12.6

表58 覚せい剤乱用への誘い

	男性		女性	
	人数	%	人数	%
ある	21	2.4	76	18.1
ない	565	65.0	240	57.1
無回答	283	32.6	104	24.8

表59 覚せい剤乱用開始年齢

	男性(n=3)		女性(n=29)	
	人数	%	人数	%
10歳以下	1	33.3	2	6.3
11歳	0	0.0	2	6.3
12歳	0	0.0	1	3.1
13歳	0	0.0	2	6.3
14歳	1	33.3	5	15.6
15歳	0	0.0	9	28.1
経験はあるが年齢はおぼえていない	1	33.3	3	9.4
無回答	0	0.0	5	15.6

表60 覚せい剤乱用頻度

	男性(n=3)		女性(n=29)	
	人数	%	人数	%
今まで1, 2回	1	33.3	3	10.3
数回以上	2	66.7	12	41.4
ほとんど毎日	0	0.0	9	31.0
無回答	0	0.0	5	17.2

表61 覚せい剤の乱用方法

	男性(n=3)		女性(n=29)	
	人数	%	人数	%
吸引	0	0.0	18	62.1
注射	1	33.3	4	13.8
吸引と注射	1	33.3	5	17.2
無回答	1	33.3	2	6.9

表62 覚せい剤への態度(男性)

	覚せい剤乱用			
	経験有(n=3)		経験無(n=845)	
	人数	%	人数	%
法律で禁じられているから、すべきではないと思う	2	66.7	685	81.1
法律で禁じられてはいるが、少々ならかまわないと思う	1	33.3	56	6.6
法律で禁じられてはいるが、それを守る必要は全然ないと思う	0	0.0	41	4.9
無回答	0	0.0	63	7.5

表63 覚せい剤への態度(女性)

	覚せい剤乱用			
	経験有(n=29)		経験無(n=373)	
	人数	%	人数	%
法律で禁じられているから、すべきではないと思う	8	27.6	240	64.3
法律で禁じられてはいるが、少々ならかまわないと思う	11	37.9	72	19.3
法律で禁じられてはいるが、それを守る必要は全然ないと思う	8	27.6	34	9.1
無回答	2	6.9	27	7.2

表64 覚せい剤禁止への態度(男性)

	覚せい剤乱用			
	経験有(n=3)		経験無(n=845)	
	人数	%	人数	%
当然だと思う	3	100.0	641	75.9
しかたないことだと思う	0	0.0	69	8.2
法律で決める必要はなく、個人の好きにさせればよいと思う	0	0.0	63	7.5
無回答	0	0.0	72	8.5

表65 覚せい剤禁止への態度(女性)

	覚せい剤乱用			
	経験有(n=29)		経験無(n=373)	
	人数	%	人数	%
当然だと思う	9	31.0	209	56.0
しかたないことだと思う	9	31.0	77	20.6
法律で決める必要はなく、個人の好きにさせればよいと思う	9	31.0	53	14.2
無回答	2	6.9	34	9.1

表66 覚せい剤の知識(男性)

	覚せい剤乱用			
	経験有(n=3)		経験無(n=845)	
	人数	%	人数	%
精神病状態	1	33.3	363	43.0
フラッシュバック	1	33.3	320	37.9
いずれも知らなかった	2	66.7	389	46.0

表67 覚せい剤の知識(女性)

	覚せい剤乱用			
	経験有(n=29)		経験無(n=373)	
	人数	%	人数	%
精神病状態	21	72.4	217	58.2
フラッシュバック	21	72.4	218	58.4
いずれも知らなかった	3	10.3	105	28.2

表68 有機溶剤で体験した症状

	男性乱用者(n=3)		女性乱用者(n=29)	
	人数	%	人数	%
精神病状態	0	0.0	15	51.7
フラッシュバック	0	0.0	11	37.9

表69 覚せい剤の知識と抑止

	男性乱用者(n=3)		女性乱用者(n=29)	
	人数	%	人数	%
使わなかったと思う	0	0.0	4	13.8
やはり使ったと思う	0	0.0	19	65.5
無回答	3	100.0	6	20.7

表70 施設退所後、乱用しないと思うか(覚せい剤乱用者のみ)

	男性乱用者(n=3)		女性乱用者(n=29)	
	人数	%	人数	%
絶対やらないと思う	3	100.0	19	65.5
多分やらないと思う	0	0.0	6	20.7
多分やると思う	0	0.0	2	6.9
絶対やると思う	0	0.0	0	0.0
無回答	0	0.0	2	6.9

表71 退所後、乱用すると思う理由(退所後「多分やる」「絶対や

	男性乱用者(n=0)		女性乱用者(n=2)	
	人数	%	人数	%
誘われたらやると思うから	0	0.0	0	0.0
今もやりたいと思っているから	1	0.0	2	100.0
いやなことがあったらやると思うから	0	0.0	2	100.0
なんとなくそう思うから	0	0.0	1	50.0

## 調査へのお願い

この調査の目的は、薬物などに対するみなさんの考えや経験を知ることです。この調査は、厚生労働省の科学研究費によるもので、現在、全国の一般中学生でも同様な調査が行われています。

自分の名前は書く必要はありませんし、集めた用紙もコンピュータで集計しますので、誰がどのように答えたのか分かりません。したがって、答えた内容が施設での生活や退院時期に影響することはありません。どうしても答えたくない質問には答えなくてもかまいません。

各質問に対する回答は、特にことわらない限りもっともあてはまる内容の番号を一つだけ選んで○をつけて下さい。

目白大学	教授	庄司正実
国立武蔵野学院	院長	相澤 仁
国立武蔵野学院	医務課長	富田 拓